

洪夏祥(ホンハソン)著「サムスン経営を築いた男 李健熙(イゴンヒ)伝」

日本経済新聞社 2003年11月20日刊を読む

サムスン、その強さの秘密

1. 「サムスンが作れば、太巻きさえヒット商品になる」

韓国におけるサムスングループの評価を端的にあらわす言葉である。これは、サムスングループのすぐれた企画力や製品生産力、マーケティング力、広告力などをもってすれば、売れない商品はないという意味だ。

2. そのサムスングループの頂点に立っているのがグループ会長の^{イゴンヒ}李健熙。父親から経営を引き継いで以来、独自の経営スタイルを貫いている。彼は、ほとんどの時間をサムスン電子本社ビルの28階にある自分の執務室ではなく、自宅がある^{ハンナムドン}漢南洞の近くにある^{スンジウオン}承志園という純韓国風の家屋で仕事をして過ごしている。仕事といっても、何時間もじっとしたまま考えこんでいるだけである。いったん考えこむと、2日間も眠らないことすらある。1日の食事が、寿司を3、4個つまむだけということもしょっちゅうだ。

3. グループが新規事業をはじめるときには、なぜ新規事業をはじめなければならないのかを少なくとも6回以上は自問し、自分で納得する答えが出るまで調査を繰り返す。そして、ふたたび「なぜ」を10回以上自問する。

4. だが、彼は未来を予見することに関しては天才的な経営者だ。静かに考えこみながら、グループに迫りつつある危機を早期に発見し、社長団を呼びつけて問題を考えさせる。つねにグループに危機意識と刺激を与え、従業員の潜在力を引き出す。

5. 彼は、^{あわ}粟の一粒一粒を観察するように、グループ企業の一つひとつを細かく見ている。そのスタイルはミクロ経営と呼んでもいいかもしれない。だが一方で、大胆な「選択と集中」も行い、マクロなグループ経営も忘れていない。その双方が李健熙の経営スタイルをあらわしてはいるのだが、彼の思考はミクロやマクロといった既存の枠組みではとらえきれないものである。彼が自宅の窓際や承志園、あるいは飛行機などで移動中に微動だにせず考えこんで到達した結論は、つねに周囲を驚かせている。

6. 彼にはソウル大学から経営学名誉博士号が贈られているが、そのほかに、犬やゴルフ、日本史、機械に関する知識も博士級である。とにかく、研究が好きなのだ。犬を飼いはじめる際にはトップブリーダー並みの飼育法を目指し、研究に研究を重ねる。ゴルフや日本史、機械についても同様である。ゴルフは、スイングやゴルフ道具の研究にとどまらず、芝生の植生まで研究し、独自の哲学的境地に辿りついた。もちろん、育児に関しても、研究書を30回以上は読み返さなければならな

いと考えている人物だ。

7. 当然ながら、李健熙は雑学に長けている。だが、彼は他人の考えや本に書いてあること、さらに自分の考えですら鵜呑みにせず、すべて疑ってかかる。自分の判断や知識にけっしてうぬぼれず、物事を「ひっくり返す」のが大好きだ。

2002年、韓国ではワールドカップでのベスト4入り ドル時代の到来や経済規模ベスト4入りも遠い未来ではないと大騒ぎだった。だが、その舌の根も乾かぬうちから、2003年の経済状況は厳冬のようなと大騒ぎをはじめている。そんな大騒ぎのなかにあって、サムスングループは2002年度の売上と純利益の過去最高額を更新するという快挙を成し遂げた。李健熙は流言や周囲の熱気をひっくり返し、2002年という年をサムスングループの歴史に刻みこんだのである。

サムスングループが成し遂げた成果を目の当たりにしながら、私のその強さの秘密——つまり李健熙という人物と独特な経営スタイル——を解き明かしたいという強い衝動にかられ、本書を執筆することにした。本書が、李健熙というカリスマの経営スタイルを理解するための一助になれば、筆者として望外の喜びである。読者諸賢の厳しい批判と叱咤をお願いしたい。

P3 ~ 5

[コメント]

本書の著者ホンハソン氏のはしがきからの引用。1997年の世界経済危機を乗り越え、また、リーマンショックを乗り越え、その後ウォン安も乗り越え、世界企業になったサムスンの強さの秘密は経営者の洞察力と意思決定にあることが本書からよくわかる。

- 2010年5月3日 林明夫記 -